

# ヒストリートⅡ開設に寄せて ④ 伊敷 勝美

来る9月7日、沖縄市は戦後をテーマにした展示室を新たにオープンする。またひとつROZASスポットが増える。

1945（昭和20）年9月7日、午前11時20分。南西諸島の降伏調印式が米第10軍（沖縄攻陥部隊）の司令部が置かれていた旧越來村字森根（現在の沖縄市、嘉手納基地内）で執り行われた。以後、沖縄は終戦と引き換えに、72（昭和47）年の復帰に至るまで米軍の統治下におかれる運命をたどることになる。

93（平成5）年、沖縄市はその日を戦争が終わり平和への第一歩を歩いた記念日として「沖縄市民平和の日」を条例化した。

極東一といわれる嘉手納基地をかかえ基地のまわりの戦

後沖縄の縮図」など称されてきた沖縄市旧「コサ」は、50年代の本格的な米軍基地建設によって誕生する。

基地から派生するさまざまなエネルギーに支えられるかのように、のどかな農村には軍作業などの職を求めて本土や奄美、県内各地から多くの

人々が集まった。また米軍人・軍属相手のレストランやストリップ、Aサインバーなどが軒を並べ、やがては、特設街も形成される。八重島、セント通り（現在の中央パーク（ベニエ）、ゲート通り（現在のコサ・ゲート通り）、照屋黒人街などといった新たな空間の登場だ。

60年代になると、基地のまわりの中心市街地は大きな打撃を受け、まわりのシャッターが次々と下ろされていった。

「シャッター通り」から「眠り」の街へ。商店街や地域の活性化、戦後文化の情報発信のため、市は2005年9月に「コサがいつの日か」を展示コンセプトに「ヒストリート」を開設した。今回はその

「戦後沖縄の縮図」展示

展示室は「写真と道具が語る世界」と題して、県出身の報道カメラマン・石川文洋氏の写真、日本道真学会の村瀬春樹とゆみこ、ながい、むら

むら民の戦中から戦後の生活道具、子どもの玩具などをメイン展示とし、多くの市民や県民の皆さんから提供された

き、大型店舗の郊外進出なども市の中心市街地は大きな打撃を受け、まわりのシャッターが次々と下ろされていった。「シャッター通り」から「眠り」の街へ。商店街や地域の活性化、戦後文化の情報発信のため、市は2005年9月に「コサがいつの日か」を展示コンセプトに「ヒストリート」を開設した。今回はその



「ヒストリートⅡ」の正面。バルミラ通りの「ヒストリート」から2軒隣の空き店舗を改装して設置したもの＝沖縄市中央

村瀬氏の提供資料は2600点を数え、随時、展示替えし、公開していく計画である。「写真と道具」と題する素材が協同して織りなす世界、「時代を雄弁に語る証言者たち」を見に来てほしい。

沖縄市の戦後文化資料展示室「ヒストリートⅡ」が7日にオープンする。その意義などを関係者、研究者に聞いてみる。

物、言葉、ファッションなど、アメリカに代表される異文化の影響を色濃く受けることを意味し、やがては在来の沖縄文化と融合しながら、極めて個性豊かな「コサ文化」を創り出すことになる。

しかし、72年の復帰後は、田舎・丸窓になる。米軍・軍属の購買力の衰退をまね

いた戦後モノ資料を紹介していく予定である。

展示室の出入り口にはランドマークとして酸欠ボックス、石川文洋氏から寄贈いた

して利用され、時着用や酔って集まり、使入してきた米兵を追い払う時にも使われたものである。

# ヒストリートⅡ開設に寄せて ⑥ 石川 文洋

沖縄市の「ヒストリートⅡ」に写真が常設展示されることになり、長年の夢が実現して喜んでいる。1998年、ホーチミン市の戦争証跡博物館に展示室ができた時、次はぜひ故郷の沖縄にも思っていた。

ベトナム戦争は、各国のカメラマン・記者が最前線長期にわたって取材することができたが、こうしたことはベトナム戦争の前にも後にもなかった。この報道によって世界の人は戦争の実体を知ることとなった。しかし一方、多くのジャーナリストが犠牲になった。

## 戦場の被害写真で想起

初めて北ベトナムを爆撃した直後にサイゴン（現ホーチミン市）へ行き、いったん帰ったが、翌65年1月から68年12月までサイゴンに在りて南ベトナム政府軍、アメリカ軍に従軍取材をした。帰国してからも、爆撃下の北ベトナム終戦直後のベトナム縦断、カンボジア国境紛争、中越戦争、枯葉剤、不発弾など現在まで撮影を続けている。

私は64年8月5日、アメリカ軍が「トンキン湾事件」で初め北ベトナムを爆撃した直後にサイゴン（現ホーチミン市）へ行き、いったん帰ったが、翌65年1月から68年12月までサイゴンに在りて南ベトナム政府軍、アメリカ軍に従軍取材をした。帰国してからも、爆撃下の北ベトナム終戦直後のベトナム縦断、カンボジア国境紛争、中越戦争、枯葉剤、不発弾など現在まで撮影を続けている。

私について司会者は「戦争中、ベトナム民衆の立場で報道し、その写真はベトナム人民の独立の闘争を後世に伝える貴重な記録となつていく」と説明していた。ベトナム戦争は主として農村が戦場となった。爆撃や砲撃で破壊される家や傷つき死んでいく家族の姿を見て沖縄戦でもこのようにして人々が犠牲になったのだらうと思いつつながらシャッターを押した。

こうした写真が戦争証跡博物館の常設展示に結びついたものと思つている。これまで沖縄市では、市文化センター、ゲート通りの空き店舗、市役所ロビーで写真展を行つた。本土での写真展と違ふところは、沖縄戦を体験した人たちが当時と重ね合わせながら写真を見ていること、戦後生まれの世代はベトナムの戦場写真から沖縄戦を想像している様子などだ。

また、市役所ロビーでは壺川小学校、中部工業高、コサ高の生徒が団体を訪れていたが、これは本土では見られないことで、沖縄の平和教育が行き届いていると思つた。沖縄市平和ネットワーク「ふーちほーネット」が催したゲート通りの写真展では、アメリカ軍を対処に英文の写真説明をつけた。若い兵

士たちがずいぶん来ていたが、ほとんどが民衆が死傷しているような写真を見るのは初めてと言っていた。父は、兵士としてベトナムへ行つたが、戦争のことは何も話さないと言ふ兵士もいた。アメリカ人にとつてベトナム戦争は思い出したくないのかも知れない。しかし兵士たちにも「ヒストリートⅡ」へ足を運んでもらいたいと願つてい



ベトナム中部ビンディン省で作戦中の第1騎兵師団兵士の前を過つて市場へ行く農民＝1966年（筆者撮影）

私は那覇市の鳥畑町で生まれたが、43年、5歳の時に本土へ移つた。故郷の人と沖縄の歴史を共有している喜びと、沖縄戦、アメリカ支配下から逃れていたというコンプレックスがある。そのような心情で、「沖縄の歴史と文化」「沖縄戦の傷跡」「ベトナム戦争と沖縄」「日本復帰」「アメリカ軍基地」「琉球舞踊」などを撮影してきた。ベトナムの写真と合わせて見ていただきたいと思つている。

（写真家）

琉球新報 夕刊 16面  
 沖縄タイムス  
 (H21)  
 2009年9月2日(水)

# ヒストリートⅡ開設に寄せて ① 山崎 孝史

沖繩の日本復帰後、基地所  
在市町村の基地への経済的依  
存は低下し、近年では一部の  
米軍基地の返還も実現しつつ  
ある。この新局面において、  
基地の跡地利用や周辺地域の  
(再)開発は関係自治体の重  
要な行政課題となっている。

北谷町のハンビータウンやア  
メリカンビレッジの建設はそ  
の種の例といえる。しかし、  
一方で米軍基地の返還が当面  
見込めず、再開発への選択肢  
が限られた地区も存在する。  
沖繩市のコザ地区はそうした  
例に属する。

コザは戦後嘉手納基地の門  
前町として栄えたが、復帰後  
は円高と本島開発に伴う郊外  
化によって衰退が著しい。現  
在、沖繩市内の開発中心は美  
里地区に移り、地元購買客は  
郊外の大型ショッピングセン  
ターに向かう。一定の需要と  
観光資源的価値を持つグレート  
通りを除けば、かつて栄えた  
商店街は今やシャッター通り  
と化している。こうした中  
心市街地の衰退をいかにし  
て食い止めることができる

のか。  
近年先進国、発展途上国を  
問わず開発の重点は工業から  
商業・サービス業へ移り、と  
りわけ持続可能な開発とし  
て、知識習得や伝統技能とい

き的大型ショッピングセンタ  
ーが建設されたでしょう。そ  
うしたところでもあるような  
機能的な空間を「場所」とは  
いわないのである。「場所」  
とその性質は、風景や街並み

## コザの歴史と文化発信

った文化資源の活用が重視さ  
れている。外部資本に依存し  
た環境搾取型、投資競争型の  
開発では地域は疲弊しかねな  
い。文化資源の開発は地域を  
持続的に発展させるのみなら  
ず、住民に自らの文化を再認  
識させ、地域への愛着もはぐ  
くむとされる。沖繩市による  
コザ・ミュージックタウンの  
建設はそうした地域の文化資  
源(琉米音楽)を活用した再  
開発の試みである。

私が専門とする地理学では  
「場所」という用語が多用さ  
れる。「場所」とは独自性・  
具体性をもち、人間の生活経  
験と結びつく主観的な空間を  
意味する。例えば、さらに地  
なった土地に広大な駐車場付

とともに人間の営みによって  
形成され、そこに生きる個人  
や集団のアイデンティティ  
の形成と密接な関係をもつ。  
地域固有の文化もそうした  
「場所」から生まれると地理  
学は考えるのである。  
私がコザを「場所」として  
みる理由はいくつもある。ま  
ず、コザは米軍が嘉手納基地  
を建設したことによって形成  
されたのであり、「コザ」とい  
う地名も米軍の誤用による  
とされる。「コザ」という意  
味で独特の「場所」なのであ  
る。

開かれ、売春を含むさまざま  
なりのわい、人種関係、そし  
て政治的対立を生み出し、今  
も「場所」の記憶として埋め  
込まれている。その典型が、  
米軍向けの飲食店・風俗店が  
なる特飲街、つまりセンタ  
ー通り(現中央パークアベニ  
ュー)やグレート通りであり、  
オキナワン・ロックやチャン  
プルー文化もここから生まれ  
た。

ある空間がこのような意味  
や文化を生み出す「場所」に  
なるには当然時間がかかる。  
戦後基地周辺に住みついた  
人々のさまざまな経験や記憶  
が、コザの街並みの形成や変  
化と重なって、独自の「場所」  
を生み出すのに二世代はかか  
っていかうか。かつてのセン  
ター通り近くに位置するビス



シャッターを閉じた店舗も見られる、沖繩市中央の  
パルミラ通りにある「ヒストリートⅡ」

トリートは、こうした世代が  
使用した日用品などの展示を  
通じて、「コザ」という「場所」  
の歴史の意味と文化を伝える  
役割を果たしている。その名  
のとおりにコザの歴史(ヒスト  
リ)は通りの(ストリート)  
に根付くといつてよい。

もちろん、この歴史や記憶  
は時間や街並みの変化とともに  
に風化し、新しい流行や文化  
にとって代わられるかもしれ  
ない。しかし、コザンチュが  
コザを愛し、「コザ活性化の試  
みが地域の文化資源を活用  
し、そしてコザを訪れる人々  
もその個性に惹きつけられる  
限り、ヒストリートがたゞい  
まねたコザの歴史と文化の参  
照点としての価値を失うこと  
はなからう。

(大阪市立大学大学院教授)

琉球新報 朝 夕  
沖繩タイムズ 13面  
(H21)  
2009年9月3日 (木)